

第二編 使命

宿命より使命へ

宿命とは、身動きの出来そうもない自分の身の上を見て、これが運命だと座りこんだり、あるいは自暴自棄になつて沈んでゆく人の物の考え方のことである。

使命とは、家のため、社会のため、国家のために、なさねばならぬこと、自分自身よりほかに成就してのない世界を見出して、それに全身全霊を打ち込んで生きる人の自覚である。

若人よ！ 宿命に泣くか、使命に生きるか。

御身がもし、重き使命を自覚する時、宿命の縄は取り去られ、運命の岩壁は打ち砕れて、かつての日には汝を苦しめると思つた一切が、汝を生かす良師であつたことがわかるであろう。

伊藤博文

山口騷熊毛郡束荷村に、田地五反歩、畑二反歩、山林六反歩を所有する、林十蔵という貧しい水飲百姓があつた。長男が利助、外に二人の子供があつた。わずか米十二石の借財に困つて、本家の林惣左衛門に懇願したが、貸してくれない。困つた末が十蔵は萩に出て足軽になり、利助は十二歳で仲間奉公に出されてしまった。

「こんな貧乏で何が出来るか。」我と我が身を卑しめ、運命の前に自暴自棄するか、つゝ立ち上つて生きぬくか。だが利助は運命を超えた。後に日本を双肩に荷つて立つた明治の元勳、大勲位公爵伊藤博文こそ、若き日の利助であつた。

ただ、彼が、桂小五郎、来原良蔵、吉田松陰等の楷導を受けたことを忘れてはならない。求める者の前にのみ、つゝ立ち上る者の前にのみ、汝に使命を与える「師」が現われる。

吉田松陰

憂国の志士松陰は言つた。

「神州の正気、既に邪氣の消蝕する所となれるか。頑兒一念此に至る。食咽を下らず、寢蓐しやくに安んぜず。」

祖国日本を憶うて、食のどを下らず、寝ても眠られぬという。

一身の安楽と平和を思うて、他を顧みぬ貪欲漢に、憂国の涙あることなし。

社会を思い、国家を思うて、一身の享樂を棄て、その生命すら献げてかかる、現代の松陰よ、立て、しかして共に祖国日本を救はん。

「かくすればかくなるものと知りながら、やむにやまれぬ大和魂」

「我今国のために死す。死して君親にそむかず、悠々たり天地の事、鑑賞明神にあり。」

国、君親、天地、明神と、松陰とは大きさを同じゅうした。その恩恵を祈願するに非ず。金剛の信念に全身全霊を托して、使命に生きる者の自証である。

貧困、病弱、不具等々、人生には多くの同情すべき人のあることを知っている。幾多の苦難に直面して身動きもならぬ桎梏の中で苦辛慘憺たる人のあることも知っている。私は多くのそれらの人の友でありたい。ともに泣き、ともに慰めあつて生きてゆきたい。

だが私はこの人たちに向かつてさえも、厳しい鞭をふり上げて、宿命の涙の谷からたたき出さずにはいられない。

明治の宗教界の巨星、清沢満之氏みつゆきは、肺結核を病み、死の数日前『我が信念』を書きのこして、後輩のための尊い道標としたではないか。盲なるがゆえに、尊きもの光を輝かし、盲人文化のために生きぬいている人があるではないか。

死の床に横たわつて叫ばれる一言すら、時に万代に人の魂をさますではないか。因果業報の鉄鎖から開放せられ、その一挙手一投足までが、一切群生の名においてなされる時、仏教ではこの人をさして大乘の菩薩とよぶのである。されば、無智文盲の老女をも、時に等正覚の菩薩の名においてよばれる。

宿命より使命への転換こそ、求道であり、信心であり、生活である。

宿命に泣く子よ、起て、しかして汝自身を教化し耕養して大使命に生きる人となれ。かつて人類が用いたあらゆる最高級の文字は汝の上におかれるであろう。

光明団の使命

人類のあらん限り、宗教はある。

これは私にとつてどうすることもできぬ人生に対する断案である。

しかして私は仏教徒である。純粹なる仏教の大信に立脚して、世界の運勢、もつと狭めて日本の現状を見よ。

一。数百年の因襲に垢つき、その恨本の如来生命を失える仏教徒は、僧俗こぞつて、その没落のぬかるみにあえぎつつあるではないか。その熱のないことを見よ。天理教、大本教、金光教等の新興宗教の白熱的運動に圧倒されるのも当然である。

家、仏教徒にして、人、仏教徒にあらず。これを全国的に見れば、わずかに高等葬式屋の形において残れるのみ。

一。いまだ過去の惰性として勢力ある地方においてすら、人心はますます寺院を離れ、寺院はただ、消極的にわずかにその勢力範囲を守ろうとして、嫉妬し、排斥し、仏陀の真精神を遠ざかりつつあるではないか。

一。さらに仏教の寺院でありながら、崇物たたりものおとし、病氣祈願等々の、外道思想に大墮落をとげて、仏教の第一義諦を全く捨てたものさえあるではないか。狐おとしをしている所に、どこに達磨の血が流れている。利己的な祈願を八十八ヶ所にして歩くお巡礼の中に、弘法大師真言密教の血があると思うか。悪無碍、無力にして死後の欲楽を求めている真宗信徒に、親鸞聖人の教行信証の真髓がわかつていようか。

かくして仏教の真髓が、日に日に埋れてゆく日に、誰がこれを正しく大衆の生活の中にひきかえすのか。

さらに私は日本の現状に活眼を開く。

一。五分の迷信と、五分の常識とをつきまぜた、迷信、邪教が、日々に、日本の低い文化層を食ってゆく。

一。お稲荷さん、お大師さん、金光さん、天理教、大本教………。それらの御繁昌はもちろんのこと、大阪、神戸などの大都市を見よ。方角博士、祈祷博士、姓名判断学博士、さては生神様等々が、社会的逼迫とともに大繁昌である。

日本の現状を、仏教を通して見る時、内も外も、かくのごとき様子である。

文化を誇る日本人が、アフリカの未開人——彼らは病気をなおすのは、たいてい祈祷である。ウンウンうなっている患者をつかまえて、わけのわからぬ祈祷をやったり、呪文をとなえたり、怪げな石をすつたり、穴のあいたカモシカの角で患部を吹いたり、それが彼らの信仰である。——必ず切開手術を要する大患をそのままに、祈祷の呪文によつてなおそうとしたり、家移りをする方角さえ方角博士をわずらわすような、低級文化の中に日本国民を埋めておいてよいか。はなはだしいのは、知識階級をもつて任ずべき、大学や専門学校を出た人たちまでが、お稲荷さんや、何々神やを祭つて盛んに拝んでいる気の毒さ。知識階級必ずしも文化人ではない。

これくらいでいい、われわれの使命ははつきりする。

一、歪曲された仏教を正しくたたき直せ。

二、仏教の真髓本質と、その形態との相違点をたたき直せ。

三、日本を野蛮未開な迷信から救え。

四、一切の社会層、一切の文化層に大乘菩薩道を承認せしめよ。

五、我らは、我らの団をおいてほかに、この使命をはたす者のないことを信じ、不借身命の志士、団員を獲得せよ。

我らは何がゆえにかくのごとく、強く信じ、絶叫し、実践するか。仏教よりほかに持たざる真理を信ずるがゆえである。これなくしては、人格生活も、社会生活、人類文化も成就されないあるもの、の提唱だからである。

かつて日本を一時風靡した倫理運動の主唱者は「法悦の生活」を説きつつも、「我らは一宗一派に偏していない」と誇り顔に堂々と広告しているのを見た。かかる宗教ありや。組みたてない家がないように、流れを持たない水がないように、長き伝統によつて、洗練されない思想宗教は、その人の独断である。酒にはカクテルが許されても、宗教に混合酒は許されない。「この十五頁に、キリスト教、仏教等々の精髓が盛られてあります」とは、何たる無智だ。「一切空」の空の一字を説くためにすら、仏教には、大般若経六百巻があるではないか。

我らは修養を軽蔑するのではない。ただ人間の深い迷妄と苦悩の解脱が、「皆様、感謝いたしましたしょう。」くらいではできないことを宣言するのである。修養運動は、修養運動の分際を知るべきことを忠告するのである。でないと、それ自身がみじめな姿を横たえる日が来るであろう。